

栄冠は君に輝く

2021. 9. 27

一月前の夏の話である。様々な意見があったが、東京オリンピックとパラリンピックが開催された。高校球児の晴れの舞台である夏の全国高校野球選手権大会も聖地、阪神甲子園球場で開かれた。本来であれば、暑い夏になるべきお盆の時期に、まるで梅雨の時期のような長雨が降り続いた。その影響で、夏の甲子園大会は、順延に次ぐ順延となった。

開会式では、今でも記憶に残る出来事があった。それは、『栄冠は君に輝く』の独唱である。甲子園に、そして全国に響き渡る見事な歌声を披露したのが、山崎育三郎さんだった。そう、NHK朝の連続テレビ小説、通称“朝ドラ”『エール』に出演して以来、度々登場している方である。

『エール』は、福島が誇る古関裕而・金子夫妻を描いたドラマである。私は、朝ドラをずっと通して見たことがなかった。録画したものを家人が見ているため、断片的に見ることはあった。そんな私が初めて全編を通して見たのが『エール』だった。

ドラマもよかったのだが、郷土福島から世に出た古関裕而さんの功績は、もっと評価されてもいいのではないかと思ったものである。あの曲もこの曲も古関先生の作曲だったのかといったぐあいである。

『栄冠は君に輝く』が古関先生の作品であることは、以前から知っていた。だいぶ昔に作られた作品のはずなのだが、古さを感じさせない。毎年、甲子園の季節がやってくると、耳にしている曲だが、そのたびに、何か新鮮ささえ感じられる。

この名曲を、山崎育三郎さんが、たった一人で歌った。きっと涙した人が多いはずである。聞いていると、自然と涙が浮かんでくる。それは、この曲がもっている力なのであろう。そして、山崎さんの歌声だからである。人の心を動かす歌声である。

私は、山崎さんの歌声だけでなく、その服装にも着目していた。真っ白なシャツに、黒系のストラックスだった。いたってシンプルかつ地味なものだった。だが、その場にはマッチしていたのである。甲子園とは、野球という競技は、そういうものだろう。あの服装で歌ったからこそ、よかったのである。私は、そう思う。

古関裕而先生の作品は、『栄冠は君に輝く』をはじめ、数え切れないほどあり、その多くが今でも歌い継がれている。作曲という活動、曲をつくるということを通して、古関先生が世の中に与えたものは計り知れない。音楽は、ずっと残る。そして、いつでも人の心を動かし、人を感動させる。

『栄冠は君に輝く』は、古関先生の偉大な作品であるが、福島が作り出したものでもある。ぜひ、福島の誇りの一つとしたい。